発表タイトル	仏教説話を題材とした説経・古浄瑠璃の諸相ー『阿弥陀胸割』を中心に
発表者所属名	日本文学研究専攻
発表者氏名	条　汐里

中世末期から近世初期にかけて成立した日本の芸能には、寺院唱導の場で語られた話を素材にした作品が少なくない。仏教の教えをわかりやすく説くために語られた譬喩や因縁話は、口頭で語られ、また経典の注釈書や談義書に所収され、写本や刊本で流布した。すでに能、狂言、幸若舞曲の分野においては、これらの譬喩や因縁話と芸能作品との関わりが指摘され成立過程が解明されているが、説経、古浄瑠璃の分野では、総括的な研究はなされていない。

本発表では説経や古浄瑠璃の中で、経典の注釈書や談義書と関わりのある作品がどれほどあるのか、隣接する芸能である能や狂言の動向を視野にいれつつ整理し、全体の傾向を分析する。その中で、特に『阿弥陀胸割』という作品を取り上げ、経典の注釈書や談義書との関わりについて具体的に報告したい。

『阿弥陀胸割』は、天竺の幼い姉弟が、亡くなった両親を供養するために身を売る物語である。早く慶長 19 年（1614）、金沢（『三壺聞書』）や、京都の仙洞御所での上演が確認され、説経・古浄瑠璃双方の台本が伝わっている。本作の最大の山場は、幼い少女が身売りをし、生き肝を差し出す場面であった。その趣向は『阿弥陀胸割』成立以後の作品である浄瑠璃『清水寺利生物語』、井原西鶴『新可笑記』、昔話「孫の生肝」にも受けつがれており、日本の文芸や芸能に多大な影響を与えたことが看取される。しかし、これほどまでに享受された『阿弥陀胸割』という作品が成立する背景や、その素材が何であるかは、ほとんど知られていない。

本発表では、まず国文学研究資料所蔵の古活字版『阿弥陀胸割』と、慶安四年版、鱗形屋版の本文を比較し、国文学研究資料館本にみえる本地語りの特徴を分析する。

次に、物語で繰り返し説かれる阿弥陀の一光三尊という表現に注目し、当時の上演図である『又兵衛遊楽図』（寛永末年頃以降〈1650〜〉所在不明）や、挿絵を取り上げながら、本作の宗教劇としての特徴と社会背景について分析する。

最後に、『阿弥陀胸割』の類話と指摘される番外謡曲《厚婦》を端緒に、関連話である『今昔物語集』巻四の四十話、さらに真福寺蔵『説経才学抄』、日光天海蔵『見聞随身鈔』、真福寺蔵『往因類聚抄』、といった寺院唱導の場で享受された説話と比較検討し、これらと『阿弥陀胸割』との共通点、相違点から、説法の場で語られた物語が、演劇へと展開してゆく過程を報告したい。